

TDA '06プロフェッショナルスクールプロジェクト
プログラムA-2 板締め染色実習レポート

■開催日時:2006年7月29日(土) 10:00-16:30

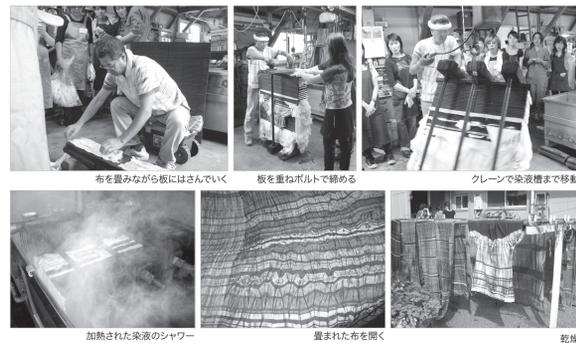
■場 所:小山織物 かつては村山大島紬を織るための絁糸を染色していたが、現在はその技法で布を染色し、ミヤケイッセイ等新しいファッションに用いられ注目されている企業です。

■内 容:絹、特殊織地に板締めの応用、スカーフ、服地等を製作。
直接染料使用



I 村山大島紬について

- ①地域をあらわす「村山」
江戸時代から通行していた「村山飛白(むらやまがすり)」等を参考にして採用されたときとされている
- ②文様をあらわす「大島」
明治末期から大正初期に新しい織物を地場産業として打ち出そうとしたときに、奄美大島で行われていた文様を中心に図案化したことから採用されたものと思われる。
- ③素材をあらわす「紬」
紬とは玉蘭などの村のある糸を手で紡いで手織りで織った生地のことであるが、明治中期以降、製糸紡績が大量生産に移行し、村山や瑞穂地域でも少なくとも大正時代には一般の絹糸を使い高機によって織った製品が通行するようになりましたが「紬」の名称を変更することは行いませんでした。
- ④板締絁(いたじめがすり)
板締とは文様を彫った二枚の板(水目桜の木を使用)の間に糸を挟み模様を染色する方法です。一枚の木型を作るのに7000円前後かかるという、この木型を何枚も使うので製品の単価は大変高くなるという。村山の絁は縦横の絁で、精巧な文様を織り出すので、大変複雑で手間のかかる作業によって行われる。高級な着物地などに使用されてきたが、最近では需要も減少している。ただしイッセイミヤケなど現代のファッションで注目されており、新しい使い方も出てきている。今回の実習では糸染めではなく、生地を板に挟んで染色する実習となった。



II 実習

①溶液 今回使った溶液は被染物5kgとして計算
染料 ・カヤラスYellow RL 0.089%(6.6g)
・カヤラスRed BWS 0.464%(34.8g)
・カヤラスBlue 4BL 1%(75g)

ソーダ灰 1g/lr (60g)
ぼうしよう 被染物5kgに対して30%(1.5kg)

②型に挟む
被染物を木型に挟み込んでいく、木型の上に生地を置き上から木型を置き、生地を折り返しさらに木型を置いていく。このようにして木型と生地を積み上げていく。このときの挟むときの布の置き方で模様の形が変わる。はさみ終わったら大きなボルトで木型をかなり強い力で固定する。

③湯通し
木型全体を湯通しする。もう一度木型がゆるむので、もう一度ボルトを締め直す。

④染色
どぶ付けの染色ではなく、循環型の染色法を採用。この方が染液の使用量が節約できる。90度～95度で10分、木型を裏返しさらに10分染色する。

⑤水洗
水を入れ替えて2回木型のまま水洗する。

⑥色止め
木型にはめたまま色止めを60度で20分行う。使用する色止め剤はサンフィックス(100cc)

⑦水洗
色止め後木型からはずし、被染物を水洗。使用した木型などはハイドロで煮込み洗浄する。

⑧乾燥
天日で乾燥して完成。挟むときの方法によって様々な模様が現れた。

(古関 崇尚)

プログラムA-3 スクリーン版製作実習レポート

■開催日時:2006年8月5日(土)

■場 所:佐藤型紙店

■内 容:シルクスクリーンの製版

